乳児保育の取り組み：
個々の子どもの発達を踏まえて

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2023-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中山, 美佐
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4889

乳児保育の取り組み
―個々の子どもの発達を踏まえて―

児童教育学部　児童教育学科　中山　美佐

要旨：本研究の目的は乳児保育の様々な形態に着目し､乳児保育の方法や形態を調査し考察したものである。特に「育児担当制」「留学」という形態をとる園の保育内容や方法から、保育所保育指針に述べられている保育の「内容」や「ねらい」に焦点をあてて聞き取り調査、検証し、乳児保育のあり方について考察を深めることである。０歳児から３歳未満児にとって「養護」の面は非常に大切である。しかし、指針にもあるように養護のみならず､「教育」の部分も重要である。個々の子どもの育ちに寄り添い応答する保育は子どもの豊かな成長に欠かせないものである。「育児担当制」「留学」からより良い保育が見いだせることが明らかになった。

キーワード：乳児保育、保育者、環境、保育方法、子どもと発達、ねらい

１. はじめに

乳児保育の乳児について、児童福祉法において「乳児」は「満１歳に満たないもの」と定義されている（児童福祉法第４条第１項)。保育所保育指針第２章「保育内容」では「乳児保育」「1 歳以上３歳未満児の保育」「3 歳以上児の保育」と３つに分けられている。また、厚生労働省「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準についての別添に示されている「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」には乳児保育とは３歳児未満児を念頭においた保育を示すとある。ここでは１歳児から３歳未満児を乳児保育の対象として捉え、１歳児から３歳未満児の遊びや、保育方法、育児担当制について述べる。主に育児担当制に焦点をあてて考察を深めていく。X 乳児保育園の育児担当制の保育者のエピソードから乳児保育の方法や形態、在り方を調査、検証し考察する。

２. 研究目的

本研究目的は、乳児の育児の方法や課題について事例をもとに考察し、担当保育制ついて検証することである。日本の保育の歴史を紐解くと「みんな一緒に」が良いとされてきた。それは保育者の経験から生み出された保育方法であった。しかし、3 歳児未満児の乳児保育については「みんな一緒に」が良いのかどうか疑問である部分もある。特に月齢差が大きい３歳未満児にとって、一斉保育という形が子どもの成長に寄り添うことができるのかと考える保育者も少なくないのではないだろうか。乳児保育は養護と教育が一体となっている。養護とは生命の保持、情緒の安定である。「食事」「排せつ」「睡眠」は特に重要であり子どもの生理的欲求がしっかり満たされなくてはならない。1 歳児からは養護の部分も大切にしながらも遊びも大切になる。保育者のかかわり方も様々な子どもの成長に合わせて保育、教育していくものであると考えられる。保育の質は子どもの育ちに非常に重要なことである。塩谷（(2020）は「乳児保育においては何よりも安心して安全に健康的に生活できること、保育者との確実な信頼関係があることが絶対条件である。そのことを確実に保証していくためには、保育の質を確保する『保育方法』がさらに検討されなければならない」[1] と述べている。保育方法の形には様々なものがある。今回は育児担当制に焦点をあてて、保育方法について考察を行う。乳児保育を行うにあたって、保育者は何を大切に保育しているのか、X 乳児保育園の「留学」という取り組み及び「育児担当制」に着目し、乳児保育の方法について調査し検証、考察する。

３. 研究方法

(1) 調査日 2022 年 2 月
(2) 調査方法　聞き取り調査
(3) 調査対象者　X 乳児保育園園長及び主任保育士
(4) 倫理的配慮　本調査は園名を明かさずまたこの調査結果を論文にて公表する旨の許諾を得ている

4. エピソード内容

＜事例１　１歳２か月Ａ君＞

Ａ君は午前８時頃に登園してきて、スポンジ製の積み木で遊んでいた。この時間は個々に登園し始め様々な年齢の子ども達がともに遊ぶ。Ａ君は積み木を持ち少しずつ集めるような遊びを始めた。積み木を集めることを楽しんでいた。少しすると、別の場所に持っていく。積み木を持って行ったり運んだりして集める。このような遊びを一人で楽しんでいた。８時半になると各クラスの育児担当保育者が来てそれぞれの部屋に子ども達を連れていく。しかし、Ａ君はこの遊びに夢中になっている。保育者は夢中になって遊んでいるＡ君を見て、無理には連れて行かず見守り、この部屋の保育者に「Ａ君は今、この遊びを楽しんでいるようなので、しばらく遊んでいても良い？留学していてもいい？」と尋ねた。Ａ君の担当保育者はＡ君のいる保育室の様子を確認し、他の子どもがゆったり遊べていること、また、保育者も子ども６人に対して４名いることからＡ君の遊びを続けさせてあげたいと考えた。Ａ君は他の子どもがそれぞれのクラスに移動しても気が付かないほど夢中になって遊んでいる。十分に遊んだ後、ふと顔を上げると、いつもの育児担当保育者がいないことに気づき、探し始めた。この行動にクラス保育者が気づき「Ａ君、お隣のいつものお部屋に帰る？」と聞いてみる。するとＡ君は自分で隣の部屋を見に行こうとした。Ａ君の育児担当保育者が「Ａ君、戻ってくる？」と聞くと笑顔で保育者に抱きついた。

図１　登園時の子どもの遊び

＜事例２　１歳 11 か月Ｂ君＞

Ｂ君はもうすぐ２歳児となる。同じクラスの育児担当保育者はＢ君が最近、２歳児の子ども達の遊びに興味を持っていることに気が付いていた。２歳児が園庭に出てくるとじっと見ては行こうかどうか迷っている様子であった。育児担当保育者はＢ君と一緒にいる他の子ども達３名の発達の様子から、もうすぐ２歳になるＢ君にとってはなんだかものたりないのではと感じていた。育児担当保育者は生活そのものを月齢が近い同じ子ども達と共にすることが多い。遊びはそれぞれ違っていても、同じ場所で遊ぶことも多い。Ｂ君は他の子どもとかかわろうとする場面も見られるが、他の子どもはまだ触ってほしくない様子である。一人で遊びたいのだろう。Ｂ君はそろそろ他のお友達とかかわりあいたいのではないかと育児保育担当者は感じ始めていた。一緒に何かをして遊ぶというより、興味があるものが２歳児クラスの子ども達の遊びにあるのではないか、また、少しは触れ合いたいのではないかと思っていた。Ｂ君は園庭で遊ぶ２歳児のボール遊びに興味を持ち２歳児クラスのところに歩いて行った。育児担当者は「Ｂ君、２歳児さんと一緒に遊ぶ？」と尋ねた。Ｂ君はすでに２歳児クラスに入ろうとしていた。育児保育担当者は２歳児クラスの保育者に「Ｂ君も一緒に遊んでいいかな？留学してもいい？」と尋ね、２歳児クラスの保育者が「今なら大丈夫、一緒に遊ぼう」と答えてＢ君に手招きをした。Ｂ君は「ボール、ボール」と言いながら他の２歳児さんと同じボールを持って転がして遊んだ。他の２歳児もＢ君が一緒に遊ぶことについて何の違和感もなく普段通りに遊んだ。Ｂ君は他の子どもが上手にボールを転がしているのを興味深く見ては、自分も転がして遊んだ。会話らしいものはなくても同じ遊びができたことはＢ君にとってはとても楽しいことのようであり、２歳児がこの遊びが終わるころ、育児担当保育者に「Ｂ君おいで」と呼ばれると笑顔で保育担当者のところに戻っていった。これを機会に、時々２歳児クラスに「留学」し遊ぶことを増やしていった。Ｂ君は２歳児の様子を見ては「Ｂ君も」と言い、一緒に意欲的に遊ぼうという様子が見られた。満足して遊んだ後は、育児担当保育者のところに戻っている。

＜事例３　２歳 10 か月　Ｃちゃん＞

Ｃちゃんはお話しもしっかりできてきておままごとやお母さんごっこが大好きである。お母さんの役が好きで「はい○○しましょうね」とお人形の着替えや、食事を食べさせる真似をして遊んでいる。お母さん役は人気でＣちゃんがしようと思っても、多くのおままごとの玩具や、お人形が他の子どもの手元にあり、できないことがある。育児担当保育者は残念そうなＣちゃんを見て、１歳児さんのお手伝いを思いつき「Ｃちゃん、エプロンを付けてあげるお手伝いして欲しいな」と声をかけた。す

ると「Ｃちゃん、お手伝いする」と目を輝かせて言った。育児担当保育者は少し時間があるときにＣちゃんを１歳児低月齢さんのクラスに連れていき「お手伝いに来ました」と言い「Ｃちゃんが、エプロンを付けてくれます」と紹介した。１歳児低月齢の子ども達は椅子に座っていてＣちゃんにエプロンを付けてもらうとにっこり笑った。Ｃちゃんは嬉しそうに、数人の１歳児さんにエプロンを付けた。１歳児さんへの留学は、Ｃちゃんにとってとても楽しい活動であり、時々「お手伝いに行く」と自分から話すこともあった。この後、お母さん役ができないときは、１歳児に「留学」してお手伝いして満足すると、自分のクラスに入り、「さあ○○しないとね」と掃除をする仕草を見せた。

図２　担当制での食事場面

5. 考察

事例１からわかることは保育者が子どもの遊びを十分に担保したいという保育者の想いである。この「留学」は、時間が来たからもうこの遊びがおしまいではなく、十分に、納得できるまで遊びに集中させてあげたいという想いからの「留学」である。子どもによっては「行くよ」と声を掛けたらすぐに遊びを止めて保育者とともについていくこともあるだろう。しかし、この時のＡ君は遊びに夢中になっていて、ものを掴む、掴んで別のところに運び、また再度、掴んで運ぶという遊びを夢中になってしていた。少し前までは歩くことが楽しいと、ひたすら歩くことに集中していたが、掴んで運ぶことができたＡ君にとってはとても楽しく、もっとしたい気持ちが強かったと思われる。これを今すぐに止める必要もないし、できるものであれば続けさせてあげたい、思う存分させてあげたいと保育者は思ったと推測する。だから今ここに留まる「留学」という選択をしたのだろう。今までは歩くことが大好きだったＡ君が、歩くこと、その上、ものを掴み、それを持って運べることはとても楽しいことだと想像する。子どもの発達を考慮すると、その遊びの担保は非常に大切である。また、子どもの遊びの担保は非認知能力を育てることにもつながると考えられている。興味を持って遊ぶ、十分満足するまで遊ぶことは、子どもの自己肯定感を育むことにもつながる。途中で「止めなさい」と遮られては、育つものも育たなくなるだろう。この時の「留学」は遊びを続けさせてあげたいという想いの中に重要な内容が詰まっている。また、十分に遊んだ後、育児担当保育者を探し、安心したい、認めて欲しいといった気持ちもあったと思われる。だからこそ、いつも一緒にいる担当保育者に抱きつきに行ったのだろう。充分に育児担当保育者との関係が形成されていて、他のクラスで不安にもならずに遊び切れたのではないだろうか。

事例２から考えられることは、保育者が子どもの成長を目の当たりにし、月齢の高い子どもとのかかわりあいを大切に考え、子どもに寄り添っていることである。子どもの遊びは成長とともに変化する。また、成長とともに子ども同士のかかわり方も変わってくる。Ｂ君にとって少し月齢が高いお友達がしていることはとても興味深く、何かを一緒にするというより、同じように遊びたい、見てみたい、やってみたいという想いが強くなっていたのではないだろうか。このような様子を保育者が見逃さず、その時を捉えてともに遊びの中に招き入れてもらうことはＢ君の心身の発達にも良い影響があったと思われる。保育者はそろそろ２歳に近づいてきているＢ君を、２歳児の遊びに近づけ、平行遊びをさせてあげたい想いがあった。その後、たびたび２歳児が園庭に来て遊ぶとき、ともに遊ぶようにしている。これは進級していくときの移行期間としても自然な流れであるだろう。いっぱい遊んだ後は育児担当保育者のもとで気持ちもゆったり過ごせたと思われる。この事例もやはり育児担当者との関係がしっかりできていることが推察される。

事例３からはＣちゃんの発達と気持ちを保育者が上手に受け止め、Ｃちゃんがしっかり気持ちの切り替えができ、年齢が自分よりも小さいお友達に優しく接することができる機会を持っていることである。この経験は例え子どもが小さくてもできることを示している。まだ、小さいからできないではなく、小さくてもできる、ま

た、この時だからできることを大切に保育している様子がわかる。この経験でＣちゃんは小さい組への「留学」が大好きになり、お手伝いできることが自信に繋がったようで、時々「お手伝いに行きたい」と自分で言うようになった。保育者の想いがうまく子どもに伝わった事例であるだろう。乳児保育園の場合２歳児はしっかりした「お姉ちゃん、お兄ちゃん」と見られていて、小さいなりにもその自覚があるのだと考えられる。

6. 総合考察

Ｘ乳児保育園では育児担当制を行っている。０歳児３人に対して保育者３から５人で担当している。これは早番や遅番などがあるためである。また１歳児６名に対して５名の保育者が担当している。これも０歳児と同じで、遅番や早番があるためである。また、関わる人数は時間帯によって多くなったり、少なくなったりしている。食事などの介助の際には多くなるように工夫されている。乳児保育園であるため子どもは０歳児から２歳児が在籍している。既に３歳を迎えた子どもも在籍している。Ｘ園の園舎環境は１階には０歳児と１歳児の保育室があり、２歳児のみ２階に保育室がある。０歳児が歩けるようになると、１歳児の部屋に行くことも多く、また、逆に１歳児の部屋から０歳児の部屋に行くこともある。しかし、２歳児の保育室に行くには階段があるため、０歳児、１歳児ともに行き来する機会は多くはない。保育者の年齢は幅広く在籍していて、経験豊富な保育者とそうではない保育者がともに同じ子どもを担当するように工夫されている。育児保育担当制は10年ほど前から行っており、園ではこの保育方法が普通になっている。また、「留学」した際には保護者に必ず様子を伝えている。大きい組さんに行ったことや、逆に小さい組さんにお手伝いに行ったという報告は保護者にとってはとても嬉しい内容であり、エピソードの一つひとつに子どもの成長と保育者の意図や想い、保護者との連携が感じられる。

また、Ｘ園では育児担当制について、子どもと合わない保育者がいた場合、適宜変更してみて子どもと合う保育者が育児担当になるようにしている。これはたびたび行うのではなく入園当初、進級当初に行っている。このことについては保護者も了解済みであり、子どもに一番良いように、園で安心して過ごせるように担当者を決めている。保育所保育指針（2017）の乳児保育に関わるねらい及び内容（3）保育の実施に関わる配慮事項には「オ担当の保育士が替わる場合には、子どものそれまでの成育歴や発達過程に留意し、職員間は協力して対応すること」[2]とある。子どもを主として考えた場合、保育士の変更や育児担当者の変更も考慮されることである。進級して担当者が変わることもあるが子ども達が成長して、今までと違う育児担当者になってもしっかり遊び過ごすことができているとのことである。Ｘ園は乳児保育園であり規模も大きくないため、どの保育者も子どもみんなを知っており、子どもの様子を保育者みんなが共有できている。そのため、園全体で保育を行うことができるようにしている。

また、保育の内容はみんなで一緒に遊ぶというよりは、それぞれ自分の好きな遊びを行うといった様子であり、保育者が一斉に子ども達と遊ぶことはあまりなく、子ども主体で遊びたい遊びを個々にする様子である。子どもによっては、また、その時々により、育児担当保育者のもとを離れて遊ぶ子どももいれば、育児担当保育者としか一緒にいられない子どももいる。個々の子どもが安心して、満足して遊ぶことが大切であり、子どもの遊びに重きを置いている。もちろん、子どもの様子から遊ぶ玩具や素材を変えてみることも行っている。

０から３歳児未満児の保育には様々な方法がある。担当制と言っても場所の担当制や月齢で分けるグループ分けのような担当制、時間で分ける担当制もある。どの担当制も良い面とそうではない面もあるだろう。場所の担当制は例えば排せつの担当保育者は子ども達が順番に排せつを促し、トイレトレーニングを行ったりする。食事担当であれば０歳児３名について保育者１名が食事介助をする。これらは場面によって保育者が変わる。これがすべていけないわけではない。時間的にはすんなり行うことができるだろう。しかし子どもにすると、順次、排せつを促されるため子ども主体というより、保育者主体になりかねない場合もあると考えられる。場所の担当制について西村（2021）は「子どもにとっては様々な場面で複数の保育士が関わるため『いつも違う』ことが常態となります。つまり『いつも同じである』ことで得る安定感や見通しを持つことが困難になりやすいと同時に、『いつも違う』という混乱を当たり前のこととして受け入れざるを得ない生活となってしまいます」[3]と述べている。また、月齢別で分けるグループ分けについては、月齢が近いため子どもの発達が同じくらいであり援助や遊びの提供はしやすいかもしれない。このことによりスムーズな保育、援助もできると思われる。ただ、子どもとの相性や同じことを同じ時間に行うなど、保育者が主になってしまう可能性もあるだろう。グループ担当制について西村（2021）は「子どもにとって遊びも生活も『グループ行動』になります。そのため、一日の中

では食事、排泄などの生活場面でも遊びの場面でも、グループ全員がそろうまでの待ち時間が生じるなどの制約が発生します。行動がグループ単位なので、子どもがグループの流れに適応することになる反面、グループの流れが一人の子どもの状態に適応するわけではありません。」[4] と述べている。子どもが主体的に生活や遊びをすることを考えると、いつもグループごとで行動するのは子どもの育ちを考えると少し無理があるように思われる。この他の担当制には、登園順で担当制を行うこともある。これは子どもの生活の流れに寄り添うことができるだろう。早く登園してくる子ども達は、遅く登園してくる子ども達よりもお腹が空くのも早い時間であるだろうし、早くに昼食を食べ、早めに午睡することができ、子ども達の生活リズムに寄り添って保育、援助ができる。しかし、子どもと保育者の相性や、子ども同士の相性はどうだろうか。うまくいけば問題ないとも思われるが登園順であるならば月齢差について悩むこともあるのではないだろうか。

どのような形であれ、子どもが主体的に、また、成長を促していける保育であれば良いだろう。しかし、前述してきたように、どこかで保育者主体になりかねない場合も考慮していく必要はあると考えられる。小さなグループの担当制であろうが、一つのクラスの大きなグループであろうが、一斉保育のようになってしまうことは多々あるのではないだろうか。個々の時間を大事に保育していると、子どもが主体であったとしても、食事を一緒に食べる食事介助や、トイレを促す時は、どうしても保育者主体にならざるを得ないことがあるだろう。この部分を個々の子どもに合わせていくのは、保育者が個々にいないと難しいのではないかと考えられる。一斉保育をどのようにとらえていくかは、園や保育者の考えにゆだねられる部分がある。保育の方法として今まで、また、今も根強くある考えは一斉保育の方が「怪我をさせにくい」「子どもを見やすい」「まとめやすい」という想いであろう。確かにこれがすべて悪いわけではない。利点もあるだろう。しかし、子ども個々の成長を育んでいくときに、子どもの個々の尊重もまた大切であることに気が付くだろう。「待たされる」「早くさせられる」ことよりも子ども自身が尊重されて主体的に活動できることは重要である。保育者はわかっていてもできないというジレンマに陥ることもあるだろう。担当制について南條（2021）は「現在、わが国で実践されている『担当制』の保育には二つの流れがあった。一つは 1999 年改訂『保育所保育指針』が打ち出された『担当制』であり、これ以降『担当制』は広く普及した。しかし、この実践内容は多様であり、特定の保育者が特定の子どもと『継続的』『応答的』に関わることによって情緒的関係を結ぶという『担当制』の本来の趣旨が生かされていないことも多く見受けられることがわかった。また、かえって『小さな一日の日課』を子ども達に強いることにもなった。その理由として、保育者の『子どもの主体性』や『大人と子どもの関係性のあり方』の理解の困難があった。」[5] と述べている。これは今後の課題となると思われる。

また、乳児保育そのものを考えるとき愛着関係についてはどの保育者も大切に考えているだろう。乳児保育を行う際に気を付けていることについてアンケートを保育者から取り結果をまとめた石川（2019）は保育者が一番大切にしている事柄で「愛着関係の醸成」「怪我、事故のないよう目を配る」が挙げられていることについて「大人の手が必要な時期であるが故に、安心、安全な環境において複数の目で見守り、愛着関係を育むことを重要視している表れであろう。乳児保育を担当する保育者が、これらの項目を意識して保育にあたっていることが窺えた。乳幼児期の愛着関係が重要であることは言うまでもないが、子どもが保育者を信頼し生活を共にできるよう配慮している様子を感じた。それは一人の保育者だけでできることではなく、保育者間の連携を図り園全体で子どもと保育者を支えようとしているのではないか」[6] と述べている。どのような方法や形の保育であったとしても、保育者は子どもとのかかわりをとても大切に保育していると思われる。特に今では当たり前のように大切にされている非認知能力やアタッチメントについては多くの保育者が学び、その重要性を認識しながら保育を行っている。アタッチメントについては乳児期において情緒的絆を保育者と結ぶことは個々の子どもの成長に大きくかかわることであり、どの保育形態であっても重要視されている。一斉保育を行っているとしても担当保育者は子どもとの情緒的絆はしっかり育む保育を行っていると思われる。

X 乳児保育園の育児担当制は時には、育児担当者の変更もし、また、「留学」という形も取り入れてより柔軟に子どもに寄り添い保育できている。月齢や年齢の違うところで過ごすことを認め、子どもと寄り添いながら保育をしている。しかし、課題がないわけではない。保育者不足であるため、「留学」したくても保育者が自分の担当の子どもで手一杯であった場合はそれを行うことは難しい。「今は無理」という場合もある。子どもにとって「今、この時」という大切な一瞬をうまく繋げることができない場合もある。保育所保育指針（2017）では

保育の方法について「ア一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願を受け止めること」[7]とある。「留学」という保育方法はこの指針に書かれていることを保育者が理解しできる場合は他のクラスに入ることや、他のクラスに留まることも可とすることにより子どもの主体性を大切に保育できていると考察される。また育所保育指針の保育の方法について「ウ子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること」[8]とも書かれている。子どもの月齢差は大きく、特に子どもの年齢が小さいほど個人差は大きい。乳児保育園にいる0から3歳歳未満児は発達に大きな差があってもおかしくない。この子どもたちの発達を考慮し、また、理解し、寄り添うことは子どもの豊かな成長に繋がると推察される。保育所保育指針（2017）の1歳以上3歳児未満の保育に関わるねらい及び内容には「(1) 基本的事項アこの時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意志や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わることが必要である。イ本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、保育の『ねらい』及び『内容』について、心身の健康に関する領域『健康』、人とのかかわりに関する領域『人間関係』、身近な環境との関わりに関する『環境』、言葉の獲得の関する領域『言葉』及び感性と表現に関する領域『表現』としてまとめ、示している」[9]と述べられている。これらの内容から読み取れることは、日々の保育者がどのようにねらいを持って子どもと接し、子どもとの関係をうまく築くかによって大きく変化すると捉えられる。いつも同じ保育、いつも同じ育児担当者では難しい場合もあるだろう。安定した生活環境はもちろんのこと、安定した保育者との関係がまず基礎としてないと、子どもの豊かな成長、それに基づくねらいは達成することは難しいのではないだろうか。保育者は保育所保育指針のねらいや内容を踏まえて保育を行う必要がある。このためには保育の形態や方法も変化していくことが子どもを主体として保育することに繋がると考えられる。「育児担当制」、「留学」は保育する中で選択肢として必要だと考察される。樋口（2018）は育児担当制の中の遊びについて「遊びなどに関しては担当児にこだわらず、クラスの他の子どもとの関係づくりにも十分配慮しながら関わっていきます。しかしながら、同時にそんな中で自分の担当児との関係をしっかり意識して、その子にとって保育園で生活しているときの精神的な『安全基地』になるよう心掛けていることが大切です」[10]と述べている。また樋口（2018）は「育児担当保育を実施していく上において、最も重要なことは『保育者同士の信頼と相互理解』です。保育者同士の人間関係がクラスの子ども同士の人間関係に大きな影響を与えることを考えれば、保育者同士が良い人間関係を築いていくことがとても大切です」[11]とも述べている。園全体で子どもを一緒に育てあうことは簡単なようで難しい面もあるだろう。しかし、保育者の意識によって子どもの育ちが変わると捉えておく必要があると考えられる。

おわりに

時代とともに様々な研究もなされ、乳児期の保育がいかに重要であるかが解ってきている。愛着関係や子どもへの関わり方によって育つこどもの様子が変化すると考察される。乳児期における保育は人としての基礎を育てるものであり、決して養護だけすればよいものではない。認知能力はもちろん大切である。非認知能力もまた、非常に大切である。乳児を取り巻く保育の環境の人的環境について加藤（2019）は「子どもは、保育者との信頼関係を築くことによって、情緒が安定し、安心して生活することができる。まず、一人の保育者が継続的に関わることにより、子どもは特定の保育者を安心できる存在として受け入れていく。信頼できる保育者の存在が、子どもの自信となり、周りに対する興味や関心を広げていく。子どもの眠い、お腹が空いた、泣くなどの要求のあらわし方は、一人一人異なっている。同じ保育者が関わることで、子どもの欲求をいち早く気づくことができる。保育者自身も子どもの世話をし、関わる中で、子どもに対して『愛する、慈しむ』という気持ちが芽生える。その相互の信頼関係こそが保育の中では何より大切であろう」[12]と述べている。特定の保育者、特に少人数での担当制はなお良いのではないだろうか。また、そこから生まれる非認知能力については見えないだけに子どもの日々の様子や保育者の関りが非常に重要である。「育児担当制」や「留学」は子どもの日々の様子に即していると考察される。

しかし、「育児担当制」に課題がないわけではない。例えば保育者自身の育ちを考えるとき、月齢でクラス分けをしていて主になる保育者がいる場合、そして一斉保育を行う場合、新任の保育者は見て学ぶ、聞いて学ぶことが多くあり、保育者を育てる環境としては良いだろう。新任保育者は多くのことを早い段階で学び、保育を行えると思われる。初めから育児担当制でありいつも頼りになる先輩保育者がいると、その中での役割が副担当者となり得ることが多くなり、保育者としての経験や学びが少なくなることも考えられる。保育者不足の中では、早い段階で保育者が一人立ちできることも早急に求められる。現場では子どもの育ちとともに保育者の育ちが求められている。保育者不足は保育の現場では大変厳しい状況にある。保育室などの環境が整っていても保育者不足で子どもの受け入れができない園もある。また、何とか保育者を確保してもギリギリの状態で保育者が疲弊してしまい離職することもある。より良い保育を行うための人材は非常に大切であり、今後、どのような形で保育を行うにしてもやはり保育者が十分に在籍していることが重要になる。前述してきた「育児担当制」「留学」についても十分な保育者がいてこそ行える保育である。また、学び続けられる保育者がいてこそ、より良い保育が行われると考えられる。

この研究ノートは日本保育者養成教育学会第6回発表に加筆を加えたものである。

謝辞

多くのことをお教えくださり、ご協力くださったX園の先生方、本当にありがとうございました。

参考文献・引用文献

1）塩谷香（2020）「乳児保育における保育方法の検討」國學院大學人間開発学研究第11号 p99
2）内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』株式会社チャイルド本社 p33
3）西村真実（2021）『育児担当制による乳児保育－子どもの育ちを支える保育実践－』中央法規出版株式会社 p9
4）同上 p 8
5）南條恵（2021）「乳児保育における子ども主体の日課と生活についての一考察－「育児の担当制」に関する先行研究の整理を中心に―」佛教大学院紀要社会福祉学研究科篇第49号 pp163 － 178
6）石川恵美（2019）「乳児保育における現状と課題―保育者のアンケートを手がかりに―」兵庫短期大学部研究収録 NO54　pp 1-8
7）内閣府・文部化科学省・厚生労働省『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2017）株式会社チャイルド本社 p 27
8）同上 p 27
9）同上 p 37
10）樋口正春（2018）『根っこを育てる乳児保育－育児担当保育が目指すもの－』特定非営利活動法人チャイルドネット大阪 p 36
11）同上 p 3
12）加藤敏子（2019）『乳児保育－一人一人を大切に－』萌文書林 pp134 － 136